2018 年 4 月 26 日放送

「第 81 回日本皮膚科学会東部支部学術大会 ①
会長講演　福島に来て学んだこと」

福島県立医科大学　皮膚科
教授　山本　俊幸

はじめに

昨年 9 月 23、24 日の両日にかけて、福島県郡山市のビッグパレットふくしまに於いて、第 81 回日本皮膚科学会東部支部学術大会が開催されました。プログラム構成には自信がありましたが思ったほど演題が集まらなかったため、果たしてどれくらいの参加者が来てくださるか心配していましたが、蓋を開けてみれば、予想を超える 850 名の参加者をお迎えすることができました。本セミナーでは当時を振り返ってお話しさせて頂きます。

本大会を担当するにあたって考えたことは、どうせやるならありきたりの学会ではつまらないと思い、随所に遊び心を加えた工夫を凝らしました。まずテーマですが、最初はやはり震災がらみのことも考え、「頑張ろう東北」みたいなものも頭に浮かびましたが、いつまでも震災を引きずっていてもダメだという思いもあり、最終的には全く関係ないものにしました。「自分で掴み取る皮膚科学」というタイトルには、皮膚科に強く

なりたければ自分で人一倍努力しなければいけないという当たり前のメッセージが込められています。

会長講演

「福島に来て学んだこと」というタイトルで、ちょうど私が福島に赴任して丸 11 年が経ちましたので、その間にやってきたこと、感じたことなどを、教室の沿革と共にお話しさせて頂きました。定番のご当地紹介から始めましたが、風光明媚なところで、自然に恵まれ、温泉、日本酒、フルーツも美味しい、等々。しかし考えてみれば日本全国そういうところはどこでもあります。福島の数ある温泉のなかでも私がとくに気に入っているのは、1,200 年の歴史を持つ二岐（ふたまた）温泉というところで、ちょっと辺鄙なところにあるんですが若い女性に人気で、ここに来ると二股をかけられていた人も幸せになれるという言い伝えは、まったくありません。

私が赴任してちょうど４年たったときに震災がおき、医局員が激減してしまいました。これまでは研究にまで手が回らず、臨床で手一杯でしたが、今年元の人数に戻ったので、もうこれまでのように人がいないからという言い訳はできないと思っています。福島県内は広くて外勤先も遠いんですが、ちゃんと生検までやって帰ってくる若い人も多くて、偉いなーと思うこともある反面、がっかりすることも多くて、違うだろー、とか、何度目だよコレ、カンファで何聞いてんのかねって思うこともしょっちゅうです。でも最近は、録音されても困りますので、喉まで出かかってもグッと飲み込んでいます。福島に来て学んだこと、そうそれは忍耐の一言と言っても過言ではないと申し添えておきましょう。

記念品はとにかく荷物にならないもの、重くないものを優先しました。福島で経験した貴重な症例をこの機会にまとめて、福島医大 100 選として CD にしました。結構大変な作業でしたが、形になってよかったです。自信作で、お陰様で好評でした。作成にあたって非常に残念なことに、震災の時の地震で、それまでデジカメの写真を保存してあった医局の Disc が落下して破損してしまいました。貴重な写真がすべておじゃんになったのは返す返す残念でなりません。

各種講演、シンポジウム

海外からの演者の先生は、私が留学していたドイツ国ケルン大学皮膚科の Thomas Krieg 教授と、米国ペンシルバニア大学の John Stanley 教授にお願いできました。また、本学からの教授陣にも「培養によらない細菌・真菌の同定」「オートファジー研究の現状と皮膚科学における可能性」「小児の発疹症とその合併症」「肺のリモデリング」「変貌する医療倫理：皮膚科の臨床研究が遭遇するいくつかの場面」といったテーマで

皮膚科と関連する話題にも触れながらご講演を頂きました。さらに、「悪化因子から考える皮膚疾患の病態」、「鑑別診断から考える皮膚疾患の病態」も、取り上げる疾患は多くなかったかもしれませんが、何かを手掛かりとしてより深く病態へ切り込む考え方のヒントを掴んで頂くことができればと思います。

シンポジウムは疾患を個別に取り上げるのではなく、少し別な観点から全部で５つ組みました。「シンポジウム１：強皮症とその類縁疾患」は、現在この分野で活躍中の若手の先生から、皮膚硬化の病態についていくつかの側面から解説して頂き、引き続いて関連する招聘講演へと移る流れとしました。「シンポジウム２：原著に触れる旅」では最近欧州の古典皮膚科学の和訳に関わられた先生方に解説を頂きました。最近は原著を読む機会が少なくなっていることがしばしば指摘されています。オリジナルの論文は、いろいろな人を介していくと元の意味と異なって解釈されてしまうことが往々にしてあり、注意しなくてはいけない点だといつも感じています。会場には若い皮膚科医も大勢つめかけていました。「シンポジウム３：自分で掴み取る臨床皮膚科学」は、これから成長していく若手にぜひ聞いて欲しいと思い企画しましたが、実際にはベテランの先生方も会場にたくさんいらっしゃいました。「本当は人に教えたくない，眼のつけどころ」（戸倉新樹先生）、「吾診から学ぶ」（石川 治先生）、「他人のエビデンスより自分の経験を：臨床もサイエンス」（片山一朗先生）というタイトルでお話し頂きました。こういうテーマでお話しになりたい先生は大勢いらっしゃると思いますが、時間の制約上3名の先生方に絞らせて頂きました。「シンポジウム４：皮膚病をもっと好きになるために」と題して、創刊40周年を迎えた雑誌皮膚病診療とのコラボ企画が実現しました。これは何年か前に大槻マミ太郎先生が東部支部学術大会でVisual Dermatologyとの企画をおやりになったのを参考にさせていただきました。前編集委員長の西岡 清先生にこれまでの歴史、現編集委員長の斎藤隆三先生に、記憶に残るテーマ、向井秀樹先生に、執筆者に求めたいことを中心にお話し頂きました。第二部は、以前の編集委員栗原誠一先生、現advisorの清島真理子先生、田中 勝先生から、最近の皮膚病診療について感じることや、今後より面白くするにはどうしたらよいか、など様々なご意見を述べて頂きました。第三部は、浅井俊弥先生から、今後時代に即した形でどう発展させていくかについてお話し頂きました。最後にフロアの先生からご意見を頂く時間を設けていたのですが、残念ながらこちらが期待していたほどの意見はあまり出ませんでした。会場前では創刊号から直近の号までの、臨床例のタイトルを一覧にしたCDを配布してもらいました。昔のタイトルだけを眺めても十分お楽しみ頂けると思います。「シンポジウム５：皮膚疾患を巡る興味深い現象～ケブネル現象と自然消退現象の病態に迫る」をテーマとしました。私はこれま

で、いくつかの現象に興味を持ってきました。本シンポジウムでは、私自身が一番話を聞きたいと思う先生方にお願いできました。また、ランチョンセミナーのお弁当は二種類を用意し好きな方を選んでもらうようにしましたが、それも面白かったと評判でした。

懇親会

福島県は、喜多方ラーメンや白河ラーメンが有名で、また蕎麦も美味しいところです。ちょうどタイミングよく学会の２週間前にテレビの番組で福島の特集があったのですが、そこで取り上げてくれたスイーツを１日目のスイーツセミナーでお配りすることができて好評でした。一方で残念なことに喜多方や白河の有名ラーメン店は出展してもらえませんでした。一次会は、新酒品評会で金賞を受賞した福島県の日本酒を取り揃え、二次会ではすごいワインを揃えました。オーパスワンも用意しましたが、それが霞んでしまうほどの、シャトー・オーゾンヌ、シャトー・シュヴァルブラン、トリロジー（ルパンのセカンド的な存在といわれている）を並べ、イントロ当てクイズに正解しないと飲めないようにしました。席数もどれくらい用意したらよいのかわからず仕舞いでしたが、最後は日皮会学会チームの方々も参加してくれ、ちょうど椅子が埋まるくらいの参加者数で本当に楽しく過ごしました。

おわりに

当日になってみないとわからない不確定な部分がいくつもありましたが、ありがたいことに、それがすべていい方へ傾いてくれました。多くの皆様のご協力を頂き無事成功裡に終えることができました。心から深謝申し上げます。